

形式的変異現象への構文文法的アプローチ

南 佑亮

1. 序論

従来、機能主義(functionalism)の立場の文法研究では、形式の差異が意味の差異を映し出すという同型性の原理(principle of isomorphism) (Haiman 1980 等)が強い影響力を持っていたため、意味の差異を伴わない形式的な変異という現象はそもそも関心の対象になりづらい傾向にあった。しかし形式的な変異現象は言語の変則的現象(anomaly)ではなくむしろ自然な現象との認識が広がるとともに、近年はこの矛盾の解決に向けた議論が盛んになってきている(Leclercq & Morin 2025 等)。このような問題意識を念頭に置き、本稿は、(1)のようなモーダル名詞句 no point を中心とする構文現象を対象に、形式的変異現象に対する認知的構文文法 (Cognitive Construction Grammar = CCxG) によるアプローチの事例研究を提示する。

(1) There is no point in getting angry. (OALD, s.v. *point*)

2. 本研究の背景

(1)の現象に対する同型性の原理を堅持した分析を行うとすれば、以下のようなものが想定できるだろう。「(1)は、(2)の形式的スキーマを持つ構文現象 (there 存在文) の pivot 名詞句が no point であり、coda に対応する in 前置詞句の動名詞句補部が意味解釈上 pivot の補文に相当している、と特徴づけられる。しかし(1)は、(3)のような個体(individual)の場所(location)を表す具現事例とは異なり、(1)の pivot の名詞句はモーダル性に関わる抽象概念を指し、coda の前置詞句は場所ではなく行為 (プロセス) を指している。このような概念上の明確な差異にもかかわらず(1)のタイプと(3)のタイプが同一の構文パターンで表現する認知的動機づけは、no point で表すモーダル判断を個体、プロセスを容器と捉える概念メタファー(Lakoff & Johnson 1980: 25-32)に見出される。」

(2) [there BE NP_{pivot} PP_{coda}] (3) There is a boy in the room.

(4) There is no point getting angry.

ところが、このような分析を適用しようとする、(1)の構文現象が示す形式上の変異現象に対して不自然な分析を実行せざるを得なくなる。例えば、coda に対応する句に in が伴わず動名詞句のみになるという点においてのみ(1)と異なる(4)の例を「(1)とは違って容器のスキーマが関わっていないため、意味概念上、(1)とは異質なもの」と見做すことになる。しかし実際には、(1)、(4)の動名詞句はどちらも pivot を占めるモーダル名詞句 no point にとつての補文と位置付けられるものであり、先行する in の有無による実質的な意味概念上の差異は認められない。したがって両者は同じ意味内容を表す構文形式の変異形(variants)と分析されなくてはならない。

CCxG には、そのような変異形の分析にとって有効な理論設計がなされている。CCxG では、言語知識の基本単位は、実際の使用によって慣習化された、あらゆるレベルの複雑性・抽象度を伴う構文(constructions)であり、話者の言語知識はそのような膨大な構文が互いに様々な形で関連し合うネットワーク (コンストラクティコン (constructicon)) を成すと仮定する(Diessel 2023 等)。構文間を結びつけるリンク(links)にはいくつもの種類があるが、特に形式の同一性によって抽象度の異なる構文単位を結ぶ垂直的リンク(vertical links)と、意味・機能上の関連性 (同質性/類似性/対立) によって異なる形式の構文同士を結ぶ水平的リンク(horizontal links)があるとされ、形式的変異現象は、意味の同質性に基づく水平的リンクによって結びつけられていると考えられている(Cappelle 2006; Van de Velde 2014; Diessel 2023; Minami in press)。以下では、この考え方に基づく調査・分析を提示する。

3. コーパス調査

The Corpus of Contemporary American English (=COCA) を用いて、モーダル名詞句 no point に補文を伴う(1)のようなタイプの構文現象の形式的変異の実態を調査した (2025年11月実施)。まず“no point”という文字列を用いて実際に存在する変異形の種類についての予備調査を行い、(i) there BE の有無、(ii) 補文の種類 (in 動名詞句、動名詞句単独、to 不定詞句)、(iii) 補文の主語の有無、という変異パラメータを特定した。以下は抽出した事例のサンプルである ((5)-(9)の例はすべて COCA より抜粋)。

(5) No point in signing an invalid contract. [(i) bare; (ii) in 動名詞句; (iii) 無]

(6) No point in me staying any longer. [(i) bare; (ii) in 動名詞句; (iii) 有]

(7) There is really no point in me taking any risks, Jeff. [(i) there; (ii) in 動名詞句; (iii) 有]

(8) There's no point us tiptoeing around if you're not even sleeping. [(i) there; (ii) 動名詞句単独; (iii) 有]

(9) There is no point for Long to take the field again this season. [(i) there; (ii) to 不定詞句; (iii) 有]

次に、以下の調査①、②を実施した。

<調査①>パラメータ「there BEの有無」「動名詞句のinの有無」に基づく4種類のデータ分布を調査
 検索式[no point in _v?g], [no point _v?g]で抽出した事例から、there BEを伴う変異形とthere BEを欠く変異形（それぞれthere、bareと呼ぶ）に手作業で分類しデータベース化を行い、4種類のデータの分布の偏りを検証した。

<調査②>補文のパラメータに「to不定詞句」を加え、補文主語の有無に基づく2種類のデータ分布を比較
 使用した検索式は、以下の通り（補文主語は、代名詞1語から成る場合のみを抽出した）。

- ・主語なし=[no point in _v?g], [no point _v?g], [no point to _v?i]
- ・主語あり=[no point in PRON _v?g] [no point in _ap _v?g], [no point PRON _v?g] [no point _ap _v?g], [no point for * to _v?i]

調査①の結果、動名詞の変異形の選択に関してthereとbareの間に有意な偏りがあることが判明した($\chi^2(1) = 14.3078, p < .01$)。具体的には、thereがin V-ingに、bareがV-ingに、それぞれ偏っていることが判明した。調査②の結果、補文主語が生起する時は、補文主語を欠く場合に比べて、(a)to不定詞の生起比率が上がる、(b)二種類の動名詞句のうちin動名詞句の選好性が上がる、(c)bareの使用率が下がる、という傾向が伺えた(表1、表2)。

表 1: no point の補文形式の分布（補文主語なし）

	in V-ing	V-ing	to V	合計
there	1417	376	21	1814
bare	290	122	1	413
合計	1707	498	22	2227

表 2: no point の補文形式の分布（補文主語あり）

	in Subj. V-ing	Subj. V-ing	for Subj. to V	合計
there	107	11	7	125
bare	10	1	0	11
合計	118	12	7	136

4. 考察

調査①の結果は、一般性・頻度の高い(2)の形式的スキーマの影響によって話者の中に形成された「there BE と coda（前置詞句）が最も好ましい組み合わせ」という認識が、水平的リンクで結ばれた4種類の変異形の分布に影響を与えている可能性を示唆している。調査②の結果については、認知的な複雑性が高い環境では明示性がより高い形式が好んで選択されるという複雑性の原理(Rohdenburg 1996)の関与が指摘できる。補文形式としてto不定詞は動名詞よりも明示性が高い(Vosberg 2009)ため、補文に主語が生起する複雑な環境では主語のない環境に比べてto不定詞が好まれるのである。しかしこれだけでは複雑性の高い環境で依然としてto不定詞句の使用頻度が動名詞句よりも大幅に低いという事実の説明がつかない。この点については、CCxGの観点を取り入れることで以下の分析が可能になる。まずin動名詞、動名詞単独、to不定詞句の間には形式的類似度に偏りがある。形式上のin動名詞と動名詞単独の類似度は明らかに非常に高く、それに比べると、これらの動名詞句とto不定詞句との類似度は低い。この類似度の差異が、2つの動名詞句間で確立したパラダイム関係にto不定詞句が加わることを困難にしている。一方で、補文主語の存在によってin動名詞句の使用率が向上するという調査②の結果は、inが文法的マーカーとして機能できる点で動名詞句単独よりも明示性が高いin動名詞句がto不定詞句の機能領域を補っている可能性を示しており、また同時に、3つの補文形式を結ぶ水平的リンクの存在を間接的に支持している。

5. 結論

本稿は、補文を伴うモーダル名詞句no pointを中心とした構文の形式的変異現象の事例研究を提示し、構文の形式的変異現象に対するCCxGの分析の有効性を論じた。本稿で触れた同型性の原理と複雑性の原理に共通することとして、言語事実がこれらの原理単独が予測する姿にはなっていないという点が指摘できる。現実には観察される言語現象は当の原理と相反する別の要因とのせめぎ合いの中で一定のバランスが取られた結果である。このような分析を可能にすることがCCxGの持つ利点の一つであり、この方向でのさらなる進展が期待できる。

<主要参考文献> Cappelle, B. 2006. Particle placement and the case for ‘allostructions’. *Constructions*, SV 1. / Diessel, H. 2023. *The constructicon*. CUP. / Haiman, J. 1980. The iconicity of grammar: Isomorphism and motivation. *Language* 56, 515–540. / Lakoff, G. & M. Johnson 1980. *Metaphors we live by*. Chicago University Press. / Leclercq, B. & C. Morin. 2025. Isomorphism and optionality in language. Workshop proposal for 58th Conference of the Societas Linguistica Europaea. / Minami, Y. in press. Allostructions and constructemes in Construction Grammar. In H. Nesi & P. Milin (eds.), *International encyclopedia of language and linguistics*, 3rd edition. Elsevier. / Rohdenburg, Günter. 1996. Cognitive complexity and increased grammatical explicitness in English. *Cognitive Linguistics* 7, 149–82. / Van de Velde, F. 2014. Degeneracy. In R. Boogaart, T. Coleman, & G. Rutten (eds.), *Extending the scope of Construction Grammar*, 141–179. De Gruyter Mouton. / Vosberg, U. 2009. Non-finite complements. In Rohdenburg, G. & J. Schläuter (eds.), *One language, two grammars? Differences between British and American English*. 212–227. CUP.

<辞書> *Oxford Advanced Learner's Dictionary* [OALD] (<https://www.oxfordlearnersdictionaries.com/>)